DESIGN IDEA

1995.4

20

デザイン・アイデア集、第20号の刊行をするまでに至った。出版回数を重ねるにつれ、多くの方々から関心を持たれ、希望されるようになったことは喜ばしいことである。

今回は、会津漆器の特集号である。会津漆器の伝統的な技法の粋を集めた作品を集録した。私共の先輩が鋭意努力され、そして培ちかってきた技法の結唱体であり、まさに逸品と言える。そこには、全ての面において"優しさ"があり"温もり"がある。

今や、漆器業界は厳しい環境下にある。この苦境をどうにかしてクリアしなければならない。そのためには、従来の物作りのみに拘泥することなく、新たな分野へ進路を見つけだすべく創意工夫する時代に入った。それも限られた地域ではなく、国際的な市場を目指しての物作りをすべきである。そのとき会津漆器の伝統的技法"優しさ""温もり"を充分に生かした作品を作ることは、現代人に喜んで受容されることと相違ないものと思われる。

その意味において、今回の会津漆器の逸品集を通して、再度その技法を見直し積極的に活用し、新規な作品へ展開されることを強く願うものである。

福島県ハイテクプラザ
会津若松技術支援センター
所長　斎藤　孔男

出品等協力者（敬称略順不同）

会津漆器協同組合連合会
㈱福文
㈱白木屋漆器店
川 俣　伝 次
角 田　弘 司
須 藤　紀 雄

参考文献

会津漆器産地診断報告書
日本漆工社日本漆工協会編

会津漆器伝統蒔絵特集

146年に木地挽など10戸ありという記録からその頃が起源とされている。1590年、近江の国より移赴した蒲生氏郷によって漆樹の栽培の奨励、技術伝承のための伝習所の設置等が行われ本格的な生産体制が作られた。1643年、保科正之が会津に入ると産業振興、技術革新が更に図られ、髹漆蒔絵、消粉蒔絵等会津漆器固有の技術や秘法が定義し生産工程別の分業体制の進展と相まって統一された会津漆器の地質が形成された。

1950年代、ライフスタイルの変化から従来の伝統技術による木製漆器と共にプラスチック素地による量産化の製品作りも推進させながら今日の形成に至っている。

椀、盆、重箱、屠蘇器等の日用品漆器が主で花塗、消粉蒔絵等が特徴で特に消金地は他の追従を許さない。昭和50年に国の伝統的工芸品の指定を、受けている。

会津絵

解説

文様の起因を立評する資料もなく推定の域をでないが秀衡椀風な意匠、様式等がみられるが雲形と桧垣の違いやその構成から共通点はみられずむしろ、信仰的意味あいが強く正月用品や祝儀様式の器として武士階級を中心に用いられ今日の吸椀や重箱、その他のものに影響していると思われる。

技術

会津絵の中には会津独特の蒔絵技法である消蒔絵は見られない。破魔失と梅の一部に消粉が蒔かわれているにすぎない。友弾でもみるような色調の桧垣、松、竹、梅、破魔失を組み合わせた織細な模様で、中央に菱形箔と綱代を組み合わせた糸巻状の模様の漆絵で、幕末から明治にかけ新しい色粉蒔絵の技法として生まれたといわれている。

錦絵

解説

明治40年頃の発明といわれている。全体のイメージが錦織りを思わせるところから名づけられたが、直接のモデルは金襴手の陶器からともいわれている。消粉蒔絵と漆絵の調和が面白く、ゴム印加飾の発達の時は量産化もされ多方面に活用された。

技術

会津で発明された加飾技術のひとつ、黒地に朱磨、朱地には黒の画形を大胆に描き、牡丹、鳳凰、宝尽し、松、竹、梅、鶴亀等の各種模様を消蒔絵の線描又は、線描の内を彩漆で埋描き又は、色粉蒔きした錦織を思わせる豪華な加飾技術で、現在も小箱や盆類に多く活用されている。

朱磨き

解 説

この朱磨は、描きぱなしのものにはない落着きがあり、朱と黒との対比にも、けばけばしさがなく豪華である。模様のデザインは桃山調の菊桐文が主で明治37年頃に描き始められた。現在もこの朱磨製品は、盆、椀、皿、膳やパネル等へ応用され幅広い人気をもっている。

技 術

朱磨きは、会津で発明された技法のひとつで地描漆で描き朱の色粉を蒔き乾燥後、摺漆を施こし引砥粉で磨いて仕上げるのであるが消金粉蒔絵と同様、のりが悪いと筆目が表られ品格を落とすため地描漆はよく混練することが大切である。

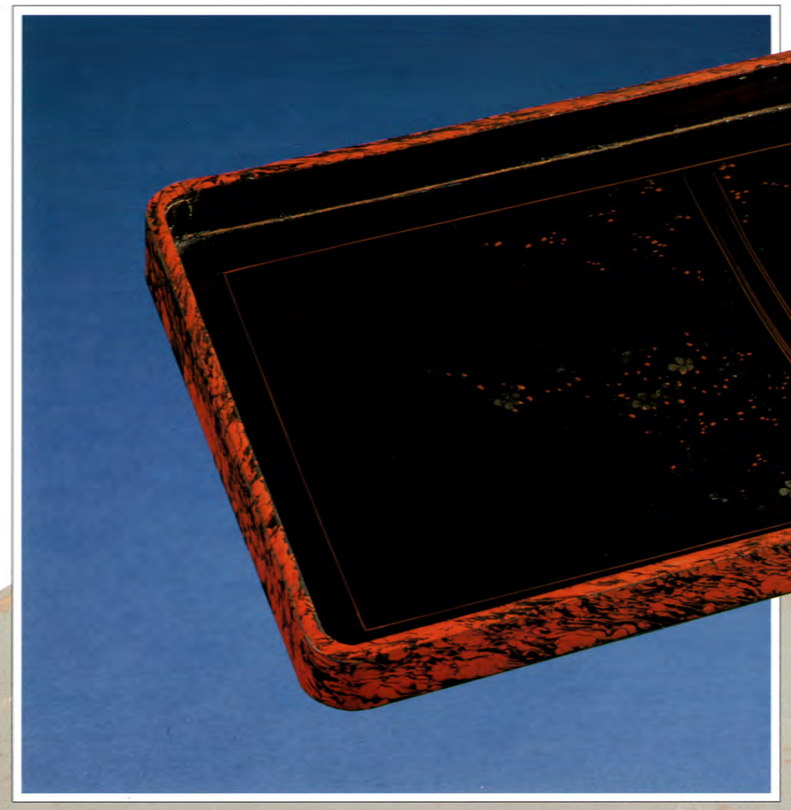
緞子絵

解 説

緞子絵は同色の濃淡で模様を現わしている点が緞子に似ているところから由来した名称である。安価で迅速にできるところから一時多量に生産されたが、現在ではほとんど見うけられない。

技 術

飴描きといって膠、胡粉、乾燥を調節するための水飴を混合した液体を温めて描き、乾燥した後全体を磨き砂などで擦って艶消しにする。それを微温湯に浸して飴描きの部分を溶かし、洗い出すと飴描きで被覆された部分だけの艶が消えずに模様が現われてくる。それに金消粉で手打ちしてアクセントをつけて表現する技法である。



綱絵

解説

綱絵は様々な工芸の分野で古くより用いられ、特に茶道具にその逸品を見ることができる。会津においては明治の中頃、通称"綱熊"本名、富取熊蔵という綱絵の名人がいて、置目もとらずに綱絵を描きそれが一般に広まり、会津の綱絵として有名になったといわれている。現在も吸椀、重箱、棗、香合と幅広くパターンとして活用されている。

技術

黒塗の器物に朱漆描きのもの、本朱又は金粉を蒔いたもの。会津の綱絵は京都の綱絵と比べ線描きが細いのが特徴である。シルクスクリーンやゴム印の普及により手描きの綱絵は、現在はほとんどみられない。

鉄錆塗

解説

この技術は江戸時代に茶人等を通じて会津に入り、江戸末期の頃会津で完成された技法といわれている。明治20年頃から大正5年頃が最盛期で女の人の仕事であったといわれている。渋味のある色彩と模様の凹凸の変化が素朴で、たくましい独特な味わいをもつが現在はほとんど見ることができない。

技術

染色用の絞り筒に漆錆を入れ絞り出しながら模様を描き、よく乾燥した後に生漆を薄く塗り、地の粉と砥の粉を等量に混合したもの、又はこれに少量の弁柄を混合した粉を蒔き古綿で磨き生漆がしみ出た頃あいに再び磨き、乾燥後馬毛、真綿等で磨き鉄の鋳物のような仕上りにする錆絵の技法である。

沈金

解説

明治の初期に会津独特の刃物が発明され現在に至っている。会津の場合は金箔以外に消金粉又は、朱、松煙等の色粉を蒔いて仕上る技法をとっている。

技術

会津の沈金は、当地で発明、工夫された刃物（薄い鋼鉄を材料にしたものと縫針の物との組み合せた刃物）でツキ彫（先方に押し出したように彫る）引彫（手前に引くように彫る）等の技術を応用し、他産地と比べ浅彫りで軟らかな感じの加飾効果がその特徴である。又、金箔以外に消金粉や色粉等を活用した仕上げ方法等もその特徴である。

消粉蒔絵

解説

この技法は、天明年間に京都の木村藤蔵によって伝えられたといわれている。ちなみに、消金粉を蒔く時に色粉と色分けしてボカシ蒔きする技法が色粉蒔絵で、会津の独特な技法として、今日も応用されている。

技術

消金粉とは、金箔を水飴と共に長期間容器に入れ、練り合せ温水で数回水簸して残った細粒子の粉をいう。この金粉を利用したのが消金蒔絵で大きく平蒔絵、（塗物に地描漆で描き消金を蒔く）と高蒔絵（高上漆で塗り上げた後描き消金を蒔く）があり漆の乾燥加減と消金蒔き締め技術が作品を左右する。他に高蒔絵を簡便に行う光付。更に高級化に考えた磨絵等の技術があり会津ならではの蒔絵技法として現在も幅広く様々な漆器に活用されている。

平極蒔絵

解 説

明治初期頃に初められた技術で褒賞条件の施行に伴う金銀木杯の製造技術から始められた技術で一般の漆器にも応用され現在に至っている。現在も叙勲等における菊紋の蒔絵技術は会津の独壇場になっており、その他、椀や重箱、文庫や正月用品等、幅広く会津の蒔絵技法として活用されている。

技 術

平極蒔絵に使用する金粉は、平極粉と称し、ヤスリですりおろした金粉で最も細い粉であるため、地描漆の調整、及び乾燥加減、平極蒔き、及び毛打ち等々、各々の工程における技術によって光沢、金色の効果が影響する極めて経験と熟練の要する技法といえる。

丸粉蒔絵

解 説

明治初期に確立されたがそれ以前にもあったものと推測される。本格的な蒔絵の技術として行われ完成されたのは明治時代といわれる。丸粉は金、銀の地金をヤスリでおろし丸味をつけた粉でその粒子の大きさは13種に分れ、その大きさは加飾目的に応じ使用される。今も、会津塗の特徴として活用されている。

技 術

丸粉蒔絵には、平蒔絵、研出蒔絵、高蒔絵、肉合研出蒔絵があり基本的にはいずれも地描・粉固・粉研・摺漆・粉磨きの順序で工程をすすめていく。会津では平蒔絵が最も多く使用され粉固めを彩漆、(色漆)で行っているところに特徴がある。この技術は椀、硯箱、文庫等に利用されているが彩漆と金、銀丸粉との調和もよく金銀丸粉のみと異なったやわらかな味のある漆器として広く利用されている。

DESIGN IDEA NO. 20

(平成7年4月発行)

会津漆器伝統蒔絵特集

会津絵……1
錦　絵……2
朱　磨……3
緞子絵……4
綱　絵……5
鉄錆塗……6
沈　金……7
消粉蒔絵……8
平極蒔絵……9
丸粉蒔絵……10

TEL0242-27-0834　FAX0242-28-6941
〒965 会津若松市門田町飯寺村西651
福島県ハイテクプラザ
会津若松技術支援センター